

—“初めて”のことは、よく覚えている。

調査を依頼されて向かったサナトリウム。とっくに廃棄されているはずなのに、稼働している謎のプールと温泉が併設された施設。

それは、UGN に協力することになって、“初めて”のお仕事だった。

緊張に身体を強張らせながら、さりとてあくまで平然を装いながら、施設に入って。

あの時、声は震えていなかつただろうか？ 脚は竦んでいなかつただろうか？

とはいってすぐに先んじて調査していた方々に、別におかしなところはなかったと言われたから、肩透かしだったけど。

今思えば、初仕事でそんなハードなことをさせないという、UGN の方々の配慮だったのだろう。他に居るオーヴァードの方々と交流をさせたかったのだろう。

小さな女の子達に泳ぎを教えて、可愛い真面目な調査員さんと恋バナをして。

……そこまでだったら、印象深くはあっても、ずっと思い返すことではなかっただろう。

◇

「—あつ、ふつ、んんつ♡」

両親も弟もとうに寝静まったであろう丑三つ刻。静寂の中、堪えきれなかつたはしたない嬌声が響く。

暗い自室、ベッドの中に隠れるようにくるまって。わたしは、自分を慰めていた。

右手をショーツの中に手を入れ、秘部を指で撫でる。とっくに濡れそぼったそこは、くちゅくちゅと淫らな音を奏でながら、侵入を今か今かと待ち構えている。

しかし、わたしの指はすじの上を這つて撫でるだけ。……膣内に入れたら、いよいよ浅ましい欲望を抑えられなくなるから。

左手で胸を持ち上げて、口元へと運ぶ。大きく育った胸のその先端は、簡単に顔まで届く。

同級生。時々お会いする親戚の叔父様方。父に連れられ挨拶する議会の方々。

彼らの視線から、自分の身体が男好きする、いやらしいものなのだと気付いている。中学時代の水泳大会や、昨年出場した陸上大会の盗撮写真が、こっそりと裏で流れているのも知っている。

彼らの妄想の中で、わたしはよがり狂い、花を散らしているのだろう。

「つ♡♡♡」

桜色の頂を舌で弾き、漏れそうになった声を、無理矢理唇を閉じることで堪える。そのせいでの乳首を強く咥えることになり、襲い来る更に強烈な快感。

もう、我慢できない。陰裂を割り開いて、ぬぷりと指が膣内に侵入する。

指を秘部に抜き挿しし、反対の手で右胸を揉みしだく。口で左の乳首を咥え、舌で転がしてねぶる。

気持ちいい。気持ちいい。気持ちいい。

—だけど。

“あの時”には、及ばない。

「～～～つ♡♡♡♡♡」

絶頂。三点の刺激は、火照った身体が達するのに十分過ぎる快楽を与えてきた。
ビクビクと跳ねる身体。汗と愛液が布団に染み込んでいく。

「.....はあ、はあ、ん、あ.....♡」

—これまでには、このように自慰にふけることなんて、なかった。

そりや、友達の噂話には聞くし、そういうことに興味自体はあったけど。それでも、いざれ会ったこともない婚約者に捧げられる身で、わざわざ男の人を喜ばせるような、そんな嗜好を持ちたくはなかった。

まあ、それでも流石に、興味本位で一度二度くらいはシテみたこともあったけど.....別に、そんな良いものでもなかつたし。

蕩けた頭で、自分がここまで淫らなモノに成り下がった理由を、あの日のことを、思い出す。

◇

可愛い真面目な調査員さんが言っていた。「ソラリスの能力を増幅させる装置が一帯に影響を与えているのです」と。

だからなのだろうか、あの施設では、いらやしい行為が行われていた。

他の人の様子を見に行って、見てしまった光景。

寝転がる男性の肉棒を、とても美味しそうにしゃぶる女の子。

綺麗な女人を貪るように腰を振る、中学生くらいの男の子。

それらにアテられていたのは間違いないと思う。いらやしい空気に呑まれていたのも確かだ。じゃなかったら、あんな簡単に流されなかつたもん。あんなにチョロくなかったもん。

.....今となつたら、なんの意味もない言い訳だけど。

ともあれ、あの人.....翼くんの第一印象は、可愛い女の子、だった。

綺麗な黒髪をツインテールにして、パステル調の可愛いビキニの、スレンダーな娘。アイドルとかもやれそうだな、なんて内心思ったことを覚えてる。

話しかけてきた翼くんは優しくて、寄り添ってくれて。一緒に居ると、なんだか落ち着いて。

実は男の子なのだと教えられた時には、すっごくビックリした。

そしてその後すぐ、耳元で囁かれた吐息。えっちな気持ちにさせる、ソラリスの香気。

振り返ってみれば、本当に手慣れたものだ。その手管で、どれだけの女の子を泣かせてきたのだろう。あっさり引っ掛けたわたしが言えることじゃないけれど。

.....火遊びしたい気持ちは、確かにあった。御父様への反発も、弟への嫉妬も。見ず知らずの男性と初夜を迎える位なら、その前に好きな人に“初めて”を捧げたいんだなんて、下らない妄想をしていたことも、ある。

だけど、初対面の男の子に、あんな簡単に身体を許してしまうなんて。

本当に、あの場所で、あのタイミングで、あの人口でなかつたら、あり得なかつたと思う。ある意味で運命なのかな、と、思わなくもない。

腰碎けになって、お姫様抱っこで個室に連れ込まれて。
流されるままに、わたしは抱かれた。

「じゃ、セッティングを」

そんな言葉と同時に彼が発した、女性を発情させる、ソラリスの香気。
抗おうと思えば抗えるのに、わたしはそれをたくさん吸い込んで、一切の抵抗をしなかった。

.....身体がとても熱くなっている、お腹の奥がムズムズして。肌が、全身が敏感になつて。溢れた愛液で濡れる脚が冷たくて。

近付いてくる翼くんの顔に、まつ毛長いなあ、なんて益体も無いことを考えて。

「たっぷり、気持ちよくしてあげます」

重ねられた唇と、ねじ込まれた長い舌。ファーストキスが、暴力的なディープキス。
絡められる舌、舐め上げられる口の中。更に送り込まれる凝縮された《快楽の香気》。
はじめての、きす。とろけちゃう。きもちいい。

ただ唇をあわせているだけなのに、なんで、こんな。

口内を蹂躪されて、快感で身体が勝手に震える。矢継ぎ早に動く彼の舌に翻弄されて息
ができない。

.....気持ち良さに窒息しそうになる寸前。そっと唇が離れて、わたし達の間に糸が引く

◦ 頬が熱い。視界がクラクラし、頭がぼーっとする。

そんな無防備なわたしを見て、翼くんは妖しく舌なめずり。一度ハグしてきた後、優しく体重をかけられて、そっと押し倒された。

「じゃあ—後戻りできなくさせてやるよ.....和葉？」

覆いかぶさって、これまで優しい丁寧語だったのに、本性を顕にした男口調。そのギャップに、思わずキュンとして。

はしたない、よくないことなのに.....きたいしてしまう。

「....きて♡」

頬に触っていた彼の手が、離れないままにゆっくりと私の身体を伝って降りていく。

指先が肌に触れるかどうかのフェザータッチで、首筋、鎖骨、肩となぞって。わざとな
のだろう、胸は避けて脇、お腹、鼠径部へと進んでいく。

くすぐったさが、快感に変換される。彼に触られたところが、ただそれだけで、どうしようもなく気持ち良かった。

手の動きに合わせて増していく欲望が、より敏感でえっちな部分に到達するのを待ち遠しく思わせる。

実際には十数秒程度の時間が、まるで数時間のように感じられるほどに。

そして、遂に。

—くちゅり♡

「ふあつ♡ あつ♡」

「ふふ。初めてにしてはすごーくぬるぬる。才能があるのかな？ それとも.....マゾ？」

なじるように笑いながら、それまで誰にも触られたことのなかった、わたしの大切なところをもてあそぶ翼くん。もうぐちょぐちょになっていることを突き付けるように、大きく水音をたてながら愛撫してくる。

思わず脚を強く閉じようとするけど、翼くんがいくら可愛くとも男の子だからか、それとも快感でわたしの力が抜けているのか、いとも簡単に抑えられて動かせない。

そこに、ちゅ、と啄むような軽いキス。たった一瞬でしかないそれで、堪らないほど幸福感が溢れ出てしまう。そんな心の機微を見透かすように笑う翼くんが、愛おしくも憎らしい。

そこから、彼の唇は、わたしの身体の色んなところに降りてきた。

アソコを指でいじくりながら、同時にリップをし、すこしざらついた舌がわたしの身体を這って舐め回す。自分のものだと誇示するように、キスマークを残していく。

—全身を、余すとこなく味わわれている。

「おっぱいもえっちな形してますねえ……ここかなあ？」

突然、乳首を二本の指で挟まれた。クリクリと巧みに擦られる。

「ひゃん♡ らめつ♡ そこ、きもちつ♡」

胸の柔らかさを堪能するように揉みしだかれて。親指が乳首の周りを円を描くように撫でて、くすぐったいような、甘い疼きを呼び起す。

翼くんの手が動く度、柔肉が彼の指の間で形を変え、指の隙間から溢れんばかりに広がっていた。

揉まれるたびにじんわりと高まっていく快感。それがどんどん膨らんでいく。

「らんでえ♡ じぶんじゃ、こんな、きもひよく……♡」

漏れ出る声が上ずって、喉が震える。

こんなの知らない。他人に触られるのは、こんなに気持ちいいの？ それとも、相手が翼くんだから？

混乱の中、ただ全身を駆け巡る電流のような快楽に翻弄されて。

……あ、なんか、キちゃう。

自分に迫るナニカが怖くなって、思わず強く目を閉じる。だけどこれが失敗だった。

視界が失われた分、より触覚が敏感になってしまって、彼の手と舌で与えられる気持ち良さが倍増する。

—きゅつ♡

不意に、とても強く、けれど痛くはない絶妙な力加減で、乳首を激しく捏ねくり回された。

□ 身体が勝手に弓なりに反って、彼の手にすがりつくみたいに、胸を押しつけてしまう。

□ 更にトドメをさすように、ゲイッとクリトリスを押しつぶされた。

強烈な電流が走ったような快感が、全身を貫く。

悲鳴が漏れそうになった口を、唇で塞がれて。

「～～～つ♡♡♡」

腰の奥から、熱い波が爆発して、全身を駆け抜けた。

頭の中が真っ白になって、足の指先まで、ガクガクと震えが走り、おまんこの中がきゅっと締まって、収縮を繰り返す。腰が浮き上がっては落ちて、太ももが内側に寄って、膝がぶるぶると震える□。

□ 肺が熱くて、汗が背中を伝う。涙がぽろっとこぼれた。

「.....はあ、は、あ.....♡」

体がふわふわ浮かぶみたいで、余韻がじんわり溶けていくのに、震えがまだ止まらない。小さくビクビクと跳ねて、甘い痺れが体を包む。

なに、今の。これが.....絶頂？

ゆっくりと唇が離れていく。それが寂しくて、思わず切なげな吐息が漏れる。

「あーあ.....そんな欲しそうな顔しちゃって.....そんなにキスが気に入った？」

楽しそうに笑う彼に、わたしはもはや抗う術がない。

「.....す、き♡」

素直な気持ちを吐き出す。もっとしてほしい。だいすき。しあわせ。

「僕も好きですよ...？ ほら、もっと舌を絡めて？」

また、翼くんの顔が降りてくる。キスを、してくれる。

惚けて開きっぱなしの唇の中に、にゅるりと柔らかな侵入者がやってくる。

ちゅ♡ちゅつ♡

せいいっぱい、つたなくも舌をからめる。

「そうそう.....いっぱい唾液交換しましょう、ね？」

優しく言いながら、彼の両手がわたしの腿に伸びる。

何をされるのか気付いて、もう散々いやらしいことをしてきたというのに、更に恥ずかしさが込み上げてくる。だけどわたしにはもはや、抵抗の余地も意思もなくて。

完全に脚を開かれて、トロトロに溶け切った淫らな雌の穴が、蜜を溢れさせるいやらしいソコが、空気に晒された。

腰を掴まれ、凶器のようにおっきな、彼の.....おちんちん、が。あてがわれる。

その硬さと熱さに、わたしでそこまで興奮してくれたんだ、と嬉しくなってしまった。

「じゃあ、入れちゃいますよ？ 戻れなくなる覚悟は.....って、聞く意味ありませんね♪」

翼くんが少しでも腰を進めた瞬間、わたしの“初めて”が奪われる。そんな状況で。

「その.....あなたも、わたしで、きもちよくなつてほしい、な.....♡」

自然と口について出たのは、そんな媚びるような、だけど心からの、懇願。

.....何故か一瞬、翼くんが固まった。

「あー……だめかも。和葉が悪いんだからな？」

初めて見る、彼の余裕のない顔。心臓が高鳴る。

「わるくないもん、わたしをこんなにえっちな女の子にさせた、キミがわるいんだよ……♡」

プツン、と。何かが切れた音が聞こえたような、そんな気がした。

パチュン、と一気に腰が付き入れられる。それは、今までとは比べ物にならないくらい、強引なもので。

それでも翼くんの《快楽の香気》と愛撫で準備万端になっていたアソコは、ぬぷふ、と抵抗なく彼の凶悪なモノを受け入れた。

「ひやあああああんっ♡♡♡」

純潔を失ったばかりだというのに。微かに、しかし確実にあった破瓜の痛みは、圧倒的な快感によってすぐさま塗り潰される。

「ほら……！ どうですか？ 手も繋いであげるし……キスもしてあげる。全身蕩けるみたいに気持ちいいでしょ？」

腰が強く打ちつけられて、ズンズンって重い音が部屋に響く。

身体の中が、毎回根元まで貫かれて、奥の壁を硬い先端で抉られるようで。

翼くんは、密着するようにわたしに覆い被さり、手を包み込むように繋いで、唇を強く押し合わせてくる。

粘着質なぬちゃぬちゃの音が、ピストンの合間に混じって、耳を赤くするのに、身体はもう彼のペースに飲み込まれていた。

引き抜かれる瞬間、真空みたいに体の中が空っぽになって、すぐにまた押し込まれて、満ちる。太い幹が、おまんこの襞を一つ一つ搔き分けて、敏感なところを何度も擦り上げる。

「うん♡ これすき♡」

クリトリスが彼の体に押し潰されて、鋭い快感がお腹の底まで響く。腰が浮き上がるたび、太ももの内側がぶつかって、パンパンって乾いた音がする。汗で滑る肌が、密着して熱を分け合う。胸が激しく揺れて、乳首が空気に擦れるだけで、ビリビリした余波が走る。

貫かれるたび、子宮口が優しく突かれて、甘い痛みが混じった痺れが、背骨を伝って頭まで届いていた。

たた、それでも……優しい翼くんは、何処かわたしを気遣っている。

「だいすき、だから……えんりょ、しないで。キミの、すきにして♡」

激しいピストンが、止まる。

どうしたんだろう、と思う間もなく、わたしの腰を掴んでいる彼の手に力が込められた。それは、少し痛いほどで。

見上げたその表情は、何かがはち切れそうな、荒々しい男性の顔。可愛らしさを放り捨てた、獰猛な眼差し。

「火遊びって言ったのに……完全に奪ってあげますよ……知らないからね？」

それが、とても嬉しくて。

なにもいわず、ただあしをひらいで。ゆびで、だいじなところを、ひろげる。

「あはは……繕えないわ、こりや」

ズン、これまで一番強く貫かれる。

まるで抑えきれない獣みたいに、激しい動き。

蹂躪される。

「はじめははっ♡ いたいって♡♡ ひいてたのにっ♡♡♡」

息も絶え絶えに、翼くんの動きに合わせ、快楽の中揺れながら、叫ぶ。

「らんでこんなっ♡ きもちいいのっ♡♡♡」

中を抉じ開けられて広げられる感覚が、気持ちいい。

自分をまっすぐ見つめてきて、求められていることに、幸福感が溢れてくる。

触れ合っている部分がどんどん熱くなり、全身に気持ちよさが伝わっていく。

肉棒が膣内を削るように出入りする度に、快感がそこから溢れてくる。中をこすられる感覚がとても気持ちいい。

そして、腰を打ち付けられる度に、一際大きい快感が生まれる。こすられるのよりも大きく、激しい快楽。

一突きされる度に、いやらしい喘ぎ声が出てしまう。

体が揺れる度に、気持ち良さが全身へと広がっていく。おちんちんが出入りする度に、わたしの中で快楽がどんどん生まれてくる。

また、イきそうになる。

だけどそこで、翼くんは意地悪そうな笑みを浮かべて、腰の動きを止めた。

「ほら、和葉も慣れたでしょ？ 動いてみてよ……」

繫がったまま、わたしの身体を抱き起こし、脚の上に乗せてくる。

……わたしは、後ろに座り込むようにお尻を落としていく。

そして、ゆっくりと、お尻を上げて、抜けきる直前で下ろす。

たどたどしくも、必死に腰を動かす。翼くんのおちんちんを、精一杯咥えこむ。

上げて、下ろす。 翼くんのモノを、あそこで上下に擦ってあげるように。

「こ、う……？ きもち、いい……？」

そっと、頬を撫でられる。

「そうそう。いい子だね、和葉。気持ちいいよ」

いい子と言われて顔がほころぶ。素直なそれがうれしかった。

「よか、った♡」

正面で、至近距離で向き合いながら、抱きしめ合いながら、腰を振る。

肩に手を置いて、体重を移しながら、腰をくねくねと回すように。壁が立派なおちんちんに沿って擦れて、微かな摩擦が熱を増す。

わたしの太ももが翼くんの腰に絡まって、大きな胸が彼の胸板に押しつけられる。心音が、互いに響き合って、まるで一つみたい。

近いからか、動く度に翼くんの表情の変化がよく見えた。快樂に歪む顔を見ると、胸が高鳴って、もっと頑張りたくなる。

ノイマンとしての本能か、微かな反応の違いを見極めて、動きに取り入れていく。

「うっ……どんどん気持ちいいところを当てていくね……えっち♥」

翼くんは、甘く囁いて、わたしの胸を喰む。乳首を甘く、強く吸い上げる。

電撃みたいな快感が、乳首の先から胸の奥まで駆け抜けて、背筋をビリビリ震わせた。

舌が絡みついて、軽く転がすように舐め回されて、甘い痺れが体全体に広がる。吸われるたび、乳首が熱く腫れ上がったみたいに敏感になって、息が止まりそう。

乳首から与えられる快樂の波が、下半身の熱と混じって、頭の中がふわふわにぼやけていく。

でも、まだご奉仕を続けなきや。

翼くんに気持ちよくなつて欲しい。だから腰を振っているだけ。内心ではそんな言い訳をしながら、浅ましくも肉欲を貪る。

「えっちでごめんなさいっ♡ はしたない娘で♡♡ ごめんなさいっ♡♡♡」

地主の娘として、相応しい振る舞いをしてきた。こんな風にあられもなく姪れる自分なんて、淫蕩にふける自分なんて、考えられなかつた。

……改めて今の自分を認識して、後ろ指を指される感覚。わたしは、欲望に負けて、良くないことをしている。

なのに。

「僕の前ならもっとえっちではしたない姿、見せて欲しいな？」

翼くんは、そんなわたしを受け入れてくれる。

蕩けるような口吻。恋人のように、愛情深く絡められる指。

舌をたっぷりからませる。縋り付くように手を強く握る。

幸せな時間だった。知らない世界だった。最初は、ただ親に言われるがまま知らない人と結婚することへの、小さな反抗程度のつもりだったのに。

眼から溢れる涙の理由は、なんなんだろう。頭がグチャグチャで、訳がわかんない。

「……して」

だから、衝動のままに懇願する。

「遊びでもいいから……今だけは、沢山愛して……！」

黒木翼くん。とても可愛くて、優しくて、カッコいい男の子。

それでいて、女の子の扱いにとても慣れていて、簡単に転がして食べてしまうような、悪い人。

分かっているのだ。彼にとってわたしは、ただの行きずりの、偶々引っ掛けただけの女。上手いことやれた、遊び相手。

.....それでもいいよ。ただ、今だけは、幸せな嘘に浸らせてほしい。

だから—そんな、かなしそうなかおをしないで。

「もう、遊びなんて言わないよ」

「—和葉は、俺のものだ」

「.....沢山愛してあげます。僕から離れられないくらいに.....♥」

強く、抱き締められる。

わたしも、彼の背中に手を回す。女の子みたいに華奢なのに、こうして触ると大きくて硬い背中。ちゃんと男の子だ。

「.....つ♡♡♡」

的確に与えられる欲しい言葉に、またあっさりと騙されそうになる。

.....ううん、騙されて良いの。上手に騙してくれるのなら、それに甘えたい。

「じゃあ、その証拠を、ちょうどい.....！」

何を、と具体的なことは言わなかった。翼くんなら、察してくれると信じていた。

.....冷静な自分が、都合のいい女だと侮蔑してくる。でも、蕩けた自分が、どんどんいけど唆してくる。

「じゃあ、たっぷりと。壊れないで.....いや、壊れちゃえ」

翼くんが、わたしを抱き締めたまま身体を曲げて、乱暴に押し倒した。

彼の体重が伸し掛かる。おちんちんが深く埋まり、押し倒される衝撃で、奥までずんっと貫かれる。

脈打つ熱が、膣内でどんどん膨張して、血管の浮き出た感触がヒダを容赦なく擦り上げる。

おちんちんの先端が、子宮口をコツコツ突いて、圧迫感が甘い痺れを呼び起こす。蜜がどろどろ溢れて、結合部をべつとり濡らして、滑りが良くなるのに、締め付けの摩擦が火花を散らす。

体に溜まった気持ちはが行き場をなくして弾けてしまいそう。爆発てしまいそう。

おちんちんに貫かれ、快楽が高まる。限界を超えて、どんどん濃くなっていく。

女泣かせのそれが入りする度に、快感が圧縮されて、つめ込まれて。

気持ち良すぎて、頭がおかしくなる。このままだと、壊れてしまいそう。

翼くんの顔が歪み、おちんちんが、膣内で更に膨らんだ。

.....足を腰に絡める。逃がさないように。

「~~~~~つ♡♡♡♡♡♡」

翼くんのモノが、膣内で一気に膨張して、脈打つように噴き出す。たっぷり、熱い精液が、奥にどくどくと注ぎ込まれてくる。

中出しの衝撃が、子宮を直接溶かすみたいに熱くて、満ち足りた喜びが体全体を駆け巡る。精液の温かさが、子宮と膣に染み込んでいく。

腰の奥から、爆発みたいな快感が噴き出して、頭の中が真っ白に弾けた。視界が星のようにちらちら散って、腰が勝手に跳ね上がる。足の指先までガクガク痙攣して、おまんこの中が彼のモノを強く締め付けて、収縮を繰り返している。

波のように、きゅつ、きゅっと絞って、残りの精液を最後まで搾り取るみたいに。

「.....あ、はあ.....♡」

きゅぽんっ、とわたしの中からおちんちんが抜ける。とてつもない喪失感と、寂しさ。

蜜と混じった白いものが、溢れ出して太ももを伝うのに、熱い余韻がじわじわ溶かしていく。息が荒く、肺が焼けるのに、吐息が甘く溶けた声になる。過呼吸を起こして胸が弾み、ぷるぷると揺れる。

.....力が、入らない。

「まだまだ、行けるよね？」

だけど、そんなわたしを見下しながら、にまあ、と笑う悪い人。

腰の前で主張しているソレは、わたしのあられもない痴態を見て、グググッと復活していく。

.....答えは、そんなの決まっている。

「.....うん♡」

甘えるように、頷いた。

「じゃあ.....もっとえっちな姿、見せて♥ 僕も.....加減してあげないから.....」

「おねがい、します.....♡」

◇

「.....はあ。なにやってるんだろ、わたし.....」

あの幸せな一時を、ことあるごとに思い出してしまう。そして火照った身体は、慰めないと収まらない。

なんともまあ浅ましく、未練がましいものだと、我ながら呆れてしまう。

.....彼は、悪い人だ。わたし以外の“良い人”なんて沢山居る。口では良いように言うけれど、どうせ誰にでも言っているのだろう。わたしなんて、所詮は遊び相手の一人でしかない。

そんな人に懸想なんとしても、悲しくて辛いだけ。

そもそもわたしには婚約者が居る。顔も知らない相手だけど、立派な方らしい。そんな良縁を捨てるなんてバチが当たるだろうし、御父様にも迷惑がかかる。

だから良いのだ。この気持ちは、はしかにかかったようなもの。時間が経てば、きっと消えてくれる。

.....でも。

「.....ごめんね、翼くん。面倒臭く縋りつかないから、迷惑かけないから」

あの日の思い出だけは、忘れないでいさせてください。